



《ドン・ジョヴァンニ》の舞台 ©Shoko Matsuhashi

ムーティの《ドン・ジョヴァンニ》 心の痛みの欠落「愛」と対置

ゲルギエフにシヨスタコーヴィチがテーマのインタビュをしていた時のこと。《ドン・ジョヴァンニ》の騎士長という言葉が、ロシア語で突然出てきて身構えた。「騎士長の石像が現われる。騎士長は殺されたのに……『しょせんはオペラの絵空事だ』と笑う人もいますでしょう。ところが、モーツアルトの音楽を聴くと、本当に恐ろしくなる。音楽にはそのような力があります」――。

ムーティが、《ドン・ジョヴァンニ》を東京で指揮した（5月1日、東京文化会館）。その稀有な演奏からは、第2幕の石像登場から地獄落ちに至る物語の真実が伝わってきた。「神の楽器」トロンボーンが、咆哮する。

地獄の業火に焼かれる人々がドン・ジョヴァンニを地底に呼ぶ。その合唱の声を、ムーティは煽りに煽った。18世紀の古典派の音楽が、ブルックナーの交響曲第9番をも思わせる世界に変わった。

《レクイエム》と同じ二短調

ムーティは、昨年9月の記者会見で、地獄落ちを先取りする《ドン・ジョヴァンニ》序曲の調が《レクイエム》と共通の二短調であることに注意を向けていた。かつて鎮魂曲と訳された《レクイエム》は、しかし、字義通りの死者の魂を鎮める曲ではない。死者や、やがて必ず終わる



ドン・ジョヴァンニは、全体のドラマで「悪」を担う役とは思われないほど、人間的な魅力を放つ。「一緒に行く」とツェルリーナを誘うリアアや、第2幕のカンツォネッタ（今回の演出では姿の見えない女性に向かって歌われる）をモーツアルトがいかに天才の業をもって書いているかがありありと伝わってくる。

共感する魂弱音で崇高に

ムーティが、地獄落ちの最強音に対置し、徹底した弱音を歌手やオーケストラに求め、崇高とさえ感じられる旋律を響かせたのは、第1幕のドン・オッターヴィオのアリア「彼女の心の安らぎこそ私の願い」ではなかっただろうか。ドンナ・アンナが復讐を叫び、怒りに震えて歌う時、モーツアルトはその音楽を決して美しく書いていない。だが、ムーティ指揮のオッターヴィオ（ジョヴァンニ・サラ）は、婚約者への思いの吐露という単純な舞台上の役割を超え、人間は他者のために共感し、行動できるといふメッセージを発するほどの高みに達していたと感じられる。

では、ドン・ジョヴァンニはなぜ、地獄に落ちるのか。どのようにモーツアルトはその音楽を書き、ムーティは指揮をしたのか。2千を超す女性と関係を結んだからといって、そ



リハーサルで東京春祭オーケストラを指揮するムーティ。弱音の影絵にも注意が注がれた ©Tara Taradate

れが即、悪であるという書き方は、ダ・ポンテもモーツアルトもしていない。なにしろドラマ・ジョコーンである。ツェルリーナはドン・ジョヴァンニに惹かれ、ドンナ・エルヴィーラも恨みこそ口にするが、すでに相手を許している。

闇夜に倒れたのは「どちら」

騎士長の殺害はどうか。ドンナ・アンナの寝室に潜り込み、追われたその場で相手を刺してしまう。今回のキアラ・ムーティの演出では、闇夜に倒れているのはドン・ジョヴァ

ンニで、直後のレポレツロの「死んだのはどちら？」という台詞が効果的に浮かび上がった。動揺のそぶりもみせず、やがては石像による再三の改悛の要求も拒否するドン・ジョヴァンニの「死」は、ドラマの幕開けですでに象徴的に示される。

石像は、夕食の招待にうなずいたり、軍靴のような響きで歩いてきたり……。初めは笑いの要素のあるジョコーンだったのが、その存在は音楽の高揚とともに凄みを増していく。すぐそこにある地獄は音楽によってリアリティを増し、ドン・ジョヴァンニはその淵に立つ。

キアラ・ムーティの解釈では、石像は、ドン・ジョヴァンニの良心。改悛の向こうに新しい生はあるが、ドン・ジョヴァンニは、悔い改めを徹底して拒む。それはある種のヒロイズムであつても、モーツアルトのオペラは、良心の痛みを覚え、自分の咎を認めない人物の断罪に踏み出す。

「もはや愛することができない苦惱」

では地獄とは、いかなるものなのか。ドストエフスキーが遺作の「カラマーゾフの兄弟」で記した言葉、「もはや愛することができない苦惱」という言葉は、ドン・ジョヴァンニ

が移る闇と、一切の希望の欠如を表しているように感じられる。

この作品は、聴く者、見る者にさまざまな思いを促す。本号の特集のシヨスタコーヴィチは、スターリンという独裁者が引き起こした「大テロル」の時代を生きた。無辜の市民が、密告やでっち上げの罪状で家族と引き離され、殺されていくのに、その独裁者は、何も感じなかったよ

うにみえる。そして21世紀の今、次ぐ戦争の中、市民の犠牲に平然としているとしかみえない国家指導者たちがいる。ドストエフスキーは、そうした心の痛みの欠如を悪の問題として、「悪霊」のスタブローギンの形象で追求している。

ムーティが断言する通り、地獄落ちの後のエピソードも大切な意味を宿す。登場人物たちは舞台上に残り、主人公の運命とともに、自分たちの未来を語る。「一緒にこれから夕食を食べましょう」と歌うマゼットやツェルリーナ、復讐という目的のなくなったドンナ・アンナとオッターヴィオ、そして、今は思いを寄せる相手がいなくなったドンナ・エルヴィーラも従者のレポレツロも、みな新しい人生を歩み始める。そこは本来、「もはや愛することのできない苦惱」の対極にある世界である。

モーツアルトは、この上ない結び方でこのオペラを終える。「ダ・ポンテ三部作は生粋のイタリア音楽である」というムーティの言葉を想い起すなら、にっこりと「チャオ、チャオ」とでもいうように。作品の味わいは深い。



ドン・ジョヴァンニの地獄落ちの場面を演じるミケレツェイ ©Shinji Hosono